研究

佐伯尋常高等小学校の沿革

（その四）大正年間

賛助会員　山内武麒
（佐伯市山手区）

○町田校長時代

大正二年一月一日から、朝起会で三大節の早朝、城山へ登り遥拝することを始めた。

この行事は其の後長く続いた。私（筆者）も小学校児童の頃この登山に参加し、城山山頂に立って東方を遥拝し、日の出を拝んで晴々しい気持になったことを記憶している。

大正二年度の第三学期に、日曜幼稚園を開設した。翌年度入学する児童を日曜毎に集め、入学前の三ヶ月を入学準備の目的で学校の空気に馴れさせたのである。その結果入学期以前に学校を知らせることが出来た。

この日曜幼稚園は、大正六年五月に学校の乗取、大田中の山名氏宅を使用して佐伯幼稚園が創設されるまで毎年継続された。これはその時分首席訓導であった高妻弘道先生の創意によるものである。私（筆者）ども四年生の時尋常科六年生であったが、毎週園児に渡すカードの作製――謄写刷の下絵に色鉛筆で色をつける作業――に手伝ったことを覚えている。

大正三年四月、貧困児童保護会が出来て、その資金調製の策として、児童演芸会を催して浮財を集めた。

四年四月から毎月一回、学年対抗リレーをすることを始めた。

五年十月に土俵場の設備が出来て、盛大な土俵開きを催した。翌年十一月二十五日に、南海部郡教育会主催の第一回郡内小学校連合運動会が、鉄道開通記念行事として本校々庭で行われ、我校は徒競走に一等を獲得した。

この連合運動会は、郡教育会で毎年行う恒例行事となった。名称も南海部郡小学校連合体育会と改め、場所も佐伯中学校（現在の鶴城高校）のグラウンドに移し、十月一日を開催日と定めて昭和十六年まで毎年開催されたが、戦時中は中止され、戦後は小学校の対抗競技が禁止されたため、郡市別々に記録会に改められて開催されている。

六年九月三日の自治展覧会に一等の成績を得た。

七年八月、町田校長別府市へ転出し、後任として藤野善吉校長を迎えた。

この町田校長時代の状況を知るために、大正二年十月から四年間本校の首席訓導として活躍された坂本喜久太先生が、「在職四ヶ年の思い出を語る」と題する手記を転記しよう。

「私が佐伯校に在職したのは、大正二年十月から六年の十一月までの四ヶ年間でした。

当時佐伯校は首席の高妻（弘道）君が鶴岡小学校に転じ、他に首席部の二三が転出した後で、学校として

は陣容が新たになつた形でした。何といつても賞て選奨された輝かしい歴史を持つた学校であり、郡当局並に町の方からも、此の際校長と職員の間に立つて、うまく協調してやれとの注文であり、自分としても可なり荷の重過ぎる感がして、果して其の重責に堪えるだろうかとの不安もあつたが、私と同時に仲間入りをした古川（喜久治）永野（道男）君等の有力な援助もある事で、駑馬に鞭うつて敢て郷土教育に尽して見たいと腮を堅めたのでした。

由来佐伯校は本郡の中枢校で、郡内の教育を左右するといつてもよい位の立場にあるので、どの方面でも充実した内容を持たねばならない。幸に職員の顔ぶれは頗るよい。所謂多士済々である。町田校長は教育に造詣深きは云う迄もなく、国語に永野（道男）衛藤（重孝）、修身に川野（峰太郎）、図画に松井（爵）、体操に並河（清水）、其他仲矢（彬）、中谷（文）、岡崎（誠）等の諸君は、皆それぞれの権威者である。それで郡内は勿論、郡外からも殆んど毎日のように参観者が来校したもので、参観後の批評研究会は相応に賑つたものでした。職員諸氏の油も相当に乗つて来たので、職員総動員で附属小学校参観に出掛けたことがあつた。

其の時分の附属参観は、午前中各学級参観、午後主事の講話、担任訓導の研究発表と、聴いて帰るのが普通でしたが、本郡は吉良芳太視学の熱心な指導で、教育の研究熱は非常に旺盛で、一寸他郡では見ることの出来ない態度が作られていた。

そこで此の日の研究会は、附属従来の型を破つて、批評に研究に総員入り乱れて議論をたたかわしたものでした。衛藤君たちが附属の首席訓導辻（英俊）君を相手に、口角泡を飛ばして激論したことは、今も耳に残っているようである。

教科に於ける研究態度の一端は右にてうかがわれると思うが、体育方面等も相当力を用いたものでした。毎木曜日の職員運動など盛んに行われた。附属参観で思い出すが、あの研究会の翌日、我が職員軍と師範生とが野球試合をした。試合半に雨となつてどしゃぶりです。雨くらい何のそのやるは〳〵、とても痛快でした。児玉（タカ）、山中姉妹（マツとサダ）、川野（キヌ）、安藤（ラノ）たちの女先生たちが、ずぶぬれで黄色い声をあげての応援です。こんなことは他では見られない図でしょう。大分方面では成程野球王国はこれだと、驚異の眼をみはつて歎称したとのことでした。

当時郡内の体育熱はあまり高まつてはいなかつたようでした。佐伯校の秋季運動会に、各学校高等科から二名づつの選手を出して、覇を争つた位でした。何とかして一般的に向上を見たいものだと、野村、阿南両氏の指導後援のもとに、郡内小学校の連合体育会が生まれる事になつた。

この体育会成立当時のことを追想すると、随分面白い問題があつたことが次々に思い出されてくる。運動競技の種類、選手券、優勝旗問題など、計画委員会はいつも議論百出で、私はその会の総務として全く声をからしてしまつた事もあつた。凡てが真剣でした。佐伯校の校旗もこの当時制定されたものです。

毎月少々づつ支給される文具料を積み立てて、職員の約半数を引き連れて、御大典臨を拝観し、京阪地方を視察したのも、また以て職員の緊張ぶりを語るものだと信じます。

優良校といい、選奨校といつても、それが五年も十年も続くものでなく、時に消長あることは免れない。

教科に対する研究、お伽会、朝起会、土曜会、音楽会、野球やランニングに、何かせねば職員として居られなかつた選奨当時の涙ぐましい態度は、大いに学ぶべきものと思われる。

○廣野校長時代

体育方面では、大正七年度、八年度、九年度、十年度と、連続して毎年十月に挙行された南郡連合体育会に優勝したことは喜ばしいことである。その他、佐伯中学校主催郡内小学校リレー競技（十一年十月）、大分県師範学校主催県下小学校メドレーリレー競技（十年十月）にも優勝した。

文芸部方面の仕事としては、九年七月に学校と家庭との連絡機関として、学報第一号を発刊した。

学報は創刊当時は新聞型であつたが、大正十二、三年頃雑誌型となり、更に昭和四年頃から再び新聞型となつた。

また、十年四月から学芸部を設け、毎月一回例会を開くことになり、奇数学年と偶数学年とが交互に読方話方を交入し、唱歌は調和制という役割で取扱われていた。

十一年五月六日、児童愛護デーの催しがあり、児童愛護の宣伝につとめた、また、全年六月十日には時の記念日の行事として、時に対する講話会を開き、時のお爺さん可笑なお爺さん、いくら呼んでもお耳はつんぼでお脚は達者の歌を歌わせ、時間を大切にすることと児童にも宣伝した。

九年四月、篤志家の寄附金三千六百円を以て理科教室と体操機械を設置した。

十一年十月三十日、学制発布五十年記念式並び教育勅語下賜記念式を挙行して、式後三の丸で記念祝賀式を催した。翌三十一日には奉安殿の落成式を行つた。

十二年四月二十日、本校創立五十周年記念式を挙行して、式後記念運動会を催した。

十三年一月二十六日、東宮殿下御成婚記念祝賀式を挙行した。

同年十二月に広野校長を送つて、佐伯町出身の高妻弘道校長を迎えた。

この広野校長時代、本校訓導として在職された平田幸市氏の手記を拔すいしよう。

私が将来の生活に若々しい希望と理想とを抱いて大分師範を出たのが大正七年の春、新道にあつた郡役所で穂坂郡長から辞令を手交されて佐伯小学校に着任した当時、校長は所田先生、二三ヶ月後別府に去られてからはずつと広野先生、首席は高司正直先生、外に吉川喜久治先生、飯沼喜三先生、永野道男先生、井上穣次郎先生、梁井覚次郎先生、出納菊二郎先生、佐藤司喜蔵先生などお歴々がずらり、何れも校長の貫禄を示して居られた。一年後には、安藤兵作先生、広末万太郎先生などの顔も揃つた。

私は、最初一ヶ年が六女、次が高一男、高二男と時ち上つて、四年目には高一二男女混成学級という、仕

事の上から相当厄介なクラスを、三の丸の門の下の教室で受持って過したのが最後であった。だから私の四年間は高等科で終始した。

其の頃の私は元気一本槍だった。だから角力、競技野球などの練習や試合の時はいつも一生懸命だった。それこそ春夏秋冬を通じて練習は休まなかった。生徒を強く勝たせるには、自分が誰にも敗けぬ事だという信念で生徒と共に努力した。毎年行われる郡連合運動会、郡内教員競技会、県の大会などをその試金石として随分火花を散らした事が、その日の私の全生活に或種の偉力を与えてくれ、とまかく今日まで頑張り通すことが出来たとも言える。当時大分や別府の各種大会に出場した以上、此度佐小チームは優勝することが通り相場であった。

玄関脇に優勝旗がふえて行くことは、その頃の一千二百の全校児童の小さい魂に強い力を打込んだもので、県下に誇るあの広大な運動場が、その頃の私等には狭くて泣かされたものだった。小学校がそんなに強かった頃には、中学校も青年団も県下に頭角をあらわしていた。

私が大分に居た頃も佐伯チームの遠征は観衆の胆を寒からしめて、いつも華々しい記録を残していた。

私が大阪に来た年の夏であった。宝塚の全国大会に東九州の代表として佐小の野球チームが乗り出したのは。以来プツリと佐伯チームと縁が切れたようで寂しく思っている。

○ 高妻校長時代

大正十四年に佐伯商業補習学校を本校内に併置し、夜間商家の子弟や店員などを対象にして、商業科を中心とした補習教育を始めた。

高妻校長は在任僅か一年十ヶ月で退き、後任の佐藤妻一校長を迎えたのは大正十五年六月であった。

高妻校長先生の手記の中には次のように記されている。

当時の職員はよく一致して私を援けてくれたものです。久し振りの佐伯出身の校長というところで、大いにやろうと思って画策していましたが、僅か一年余りで退職するようになったので少しも印象を残さず、それば かりが今でも残念であります。

私（筆者）もこの時分、若い訓導として佐伯小学校に籍をおいていた。その頃のことを憶い出すままに記してみよう。

私は大正十一年に大分師範を卒業して、直に小倉第十七聯隊に一年現役兵として入隊し、一年間兵営生活を送りました。退営して十二年四月から十四年三月まで蒲江小学校に勤務し、十四年四月佐伯小学校へ転任して来ました。校長は高妻先生でした。高妻先生は私どもの小学校時代に佐伯校に居られた先生で、子供の頃はこわい先生の一人でしたから、赴任当初はびくびくしていましたが、心はとてもやさしい先生でした。

私は六年男子の担任を命ぜられました。六年男子は二学級あって、第二十一学級を私が、第二十二学級を李矢正木君（現在別府市に在住、石松と改姓していま）が担任しました。その頃は県下挙げて少年野球が盛んで、佐伯校は毎年大分市で行われる野球大会に出場して、連続優勝する常勝校でありました。その年は自組

（音楽科主！ム）が出場することになっていたので、赴任した日から本矢君と練習を始めました。この チーム は五年生の頃からよく練習していて上手な児童が多く、その中でも投手の扶開若（当時の佐伯高等女学校長扶開俊雄氏の御子息）は名投手でした。五月に大分市で大分新聞社（現在の大分合同新聞社）主催で東九州少年野球大会が開催され、我が B 組チーム は運よく優勝し、来る八月に宝塚で行われる全国大会に東九州代表として出場することになりました。それから六月、七月と暑さにめげず毎日毎日猛練習を重ねました。阿南卓先生が毎日お出でになり指導して下さいました。高妻校長をはじめ皆んなの先生方の激励に選手たちは一生懸命に練習して、五月の頃とは見違える程ど上達しました。よく先生チーム と練習試合をしましたが、その時此度高妻校長が投手と買って出ていました。（実は投手にしないと気嫌が悪かったのです）。私は毎日の練習で急に疲労（顔面神経まひ）にかかり、とうとう大会には選手に付添って行けなくなって、高妻校長自ら選手と引率し、阿南先生が監督となって遠征しましたが、武運拙なく第一戦で敗退してしまいました。

十五年度の新学期を迎え職員一同張切っていましたが、六月高妻校長が急に退職して、北海部郡から佐藤喜一校長を迎えました。私はそれから昭和三年三月まで佐藤校長の下に勤務して大島小学校へ転任しました。

（終）

（28ページ下段より（つづき））

春霞となるかもしれぬ。そしたら当分、雨の城山を訪れる人もいないだろうと思ったりしている。

（住所　宮崎県日向市美々津町）

（7ページ下段より（つづく））

先述した弥生町小倉の慈崖塔造立年次、康永四年は北朝年号で、この辺りが北朝色豊かな頃のものである。これらは南北朝争乱の消長を物語り、この平和な佐伯地方もかつて争乱の渦中にあったことを示している。南朝年号といい、北朝年号と謂う、当時の争乱の名残りを留め、更に権力の推移を物語る貴重なものであろうか。（終）

（住所　南海部郡弥生町大字江良）

朝報。――三の丸の御殿、移築への動きが……。

かねてからその取壊しが決定的であった三の丸の御殿が、市内某地区の切なる要望により、船頭町河畔の市有埋立地に、移築・保存の動きを見せている。寄びにたえない。

願わくば今の御殿の姿を、出来るだけそのままに移して、後世にのこされるように。

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

――主として水揚の流通について――

大分県立佐伯豊南高等学校
教諭・同校郷土誌クラブ顧問
本会会員　市野瀬　仁

第二章　佐伯港

第二節　その社会的環境（つづき）